

静坐の友



季刊 54 号

静坐の友社

編集発行人 松端孝元

〒五九六—〇〇〇二

大阪府岸和田市吉井町一—二〇—四

TEL 〇七二—四四四—五九七五

FAX 〇九〇—三六二九—二二五〇

携帯

先人を偲ぶ 曾我 了雲先生を訪ねて

事務局 松端 孝元



<昭和 50 年>

一月新年号に掲載の「先人を偲ぶ」シリーズには、どなたに登場してもらおうかと思案にくれ、中谷先生に相談いたしました。

そうすると、すぐ、「曾我了雲先生」はどうかとのお返事をいただきました。

しかし私としては曾我了雲先生については、残念ながら経歴も何も存じ上げておりませんのでどうしたものかと思案顔をしたのだと思います。中谷先生はすぐ、察したのだと思います。「曾我先生なら、重川先生が一番よく知っているし、藤井英昭先生の奥さんのお父さんでもあるし、資料が無かったら尋ねればいくらでもでてくるだろう。」というようなアドバイスでした。

これは有り難い。これなら思い出話も聞けるだろうし、写真なども豊富にあるだろうと思ひ、曾我

先生の足跡を訪ねることに致しました。

早速、手元にある、古い静坐機関誌のファイルを開き手掛かりを探しました。不思議なことに、不揃いの機関誌ファイルですのに、その一番上は、どうした偶然でしょうか、了雲先生を偲ぶ追悼号でもありました。(静坐第六七号)

そこには、「曾我了雲先生を偲んで」というタイトルのもと、藤井英昭先生の記事があり、さらに、「恩師曾我了雲先生の思い出」と題する河合貞先生の記事、さらに前井先生の記事も掲載されていました。

この号では、字数の関係上、藤井先生、前井先生の記事のみになりますが紹介させて頂きます。

それにしてもこれだけでは資料が少なすぎると思案しておりましたところ、中谷先生のお声がけで、重川先生、松下正義先生から貴重な資料が送られてきました。又、ご子息の曾我了二先生からは、「雲になって」という立派な先生の追悼文集を送ってきて下さいました。これらを手掛かりに了雲先生の後を訪ねてみます。



曾我了雲先生を偲んで

藤井 英昭



【信子先生にあつては静坐が生活の中心で、他のことは、みな従であつた。我々はその反対である。】—この種の珠玉の言葉をもう聞けないと思うと、寂しさが胸に迫ってくる。

岳父には貴族趣味・権威主義がカケラもなかった。一方、無手勝流という妙な若々しさがあつた。それが私に不透明な目をもたせた。しかし、よく考えてみると、その不透明なものは、私の内なる権威志向というか、形式にこだわる悪しき根性に外ならない。ということに気付くのがあまりに遅かつた。もっと早くから、もっと素直にお話を聞くべきだつた。

葬儀の弔辞の中で、「痛恨の極み」という句を二度聞いた。たぶん常套語なのだろう。しかしこの語句の本来の意味で、今、岳父を失つたことは「痛恨の極み」である。もっと長く見守ってほしかつた。相談にも乗ってほしかつた。どうして定期検査を受けられなかつたのですか。なぜ、漢方薬に固執されたのですかと私の愚痴は尽きません。この文を次のような月並みなことばで結ぶのはとてもつらいことです。

これから小林先生や岳父に会うには、私の日々の静坐の内においてのみ。外にはないと。

曾我先生のお言葉と書簡

前井 重美



お念仏に静坐に、お導き頂いた曾我先生の思い出のひとつでもと思いペンをとりました。なかなか文章にまとまりません。聞き覚えてお言葉、頂いたお手紙を代わりにあげて、先生の温かい、お心深いお教えをお偲びします。

「歎異抄は、原文で暗唱できるほどお読みなさい。」

「蜂屋先生の歎異抄講話を読んでいますか。あれは良い本ですね。」

「毎朝、御和讃を読んでいますか」
—書簡—

「坐の功德無限、その無限にひかれて日々の坐が開かれるということではありませんか。」

(四八・一一・二八)

「静坐は苦悩の解決に直接役に立つことはないでしょう。しかし苦しくて身のおき場のないとき、この身の扱いに困るとき、坐するという道がひとつあって、苦しみの正体を見せてくれます。正体が見つかれば、苦しみは苦しみながら受けて立つより外にないことを知らされます。」

人間の苦悩の多くは時が解決してくれます。すべては流動し、輾転し、やむところが

ありません。苦悩は一つの停滞です。

静坐はこの流動に呼吸を合わせ、停滞を許しません。そこに自らの救いが出てくることではありません。少し気になりましたので一筆誌しました。ともかくもお坐りください。

(四五・七・二八)



曾我了雲先生略歴

明治三九年三月七日 山口県大道市に出生

昭和六年三月 京都帝国大学哲学科卒業

昭和二年三月 相愛高等学校教諭

昭和二年一月 神戸市教育委員会勤務

昭和二年七月 同社会教育課長

昭和二年五月 学校法人成徳学園理事

昭和三年五月 神戸市退職

昭和三年六月 神戸市産業教育実習所長

昭和三年六月 神戸市産業技術学院事務長

昭和四年四月 神戸女子大学教授

昭和四年六月 学校法人成徳学園理事長

昭和四年九月 成徳学園高等学校校長

昭和五年三月三日 死去



了雲先生の足跡を訪ねるにあたり、まず、「雲になって」と言う了雲先生の追悼文集のページをめくってみました。そうすると小松幸蔵先生の文章が目飛び込んできましたので勝手ですが少しずつ割愛させて頂きエッセンスだけご紹介させて頂きます。まだ先生が大阪府立大学の教授をされていた頃の文章です。

次に、残部がないのでお返しするという約束で送っていただいた了雲先生の歎異抄講座「成徳文庫」第五号を見ていきますと巻末に重川先生が英語科教諭として、島田恵子先生が社会科講師として在籍されていた時の追悼文がありましたので小松先生に引き続いて紹介させて頂きます。

静坐の先輩・曾我了雲さん

(大阪府立大学名誉教授 小松 幸蔵)



曾我さんの静坐歴は古く、甲陽中学校の生徒の頃、親友の藪内清さんらと一緒に受持ちの田中孝雄先生から岡田先生の静坐を教えて頂いたということです。そして、昭和二年、小林信子先生がお始めになった第一回夏期静坐実習会には姫路高校生として参会されました。翌三年、仏教学専攻のため京大文学部に入学すると同時に五条大橋の近くで毎週一回開かれていた小林先生ご指導の静坐会に通わ

れました。

その頃、三年の春、私を曾我さんに紹介してくれたのは大阪高校から一緒に京大理学部に進んでいた藪内さんです。藪内さんは私から実業の日本社発行の「岡田式静坐法」を頼りに静坐練習を続けているのを知っていましたので、曾我さんを紹介者として、私を小林先生ご指導の静坐会に誘ってくれたのです。そして、藪内さん自身も中学時代以来、久しぶりに静坐会に熱心に通うことになりました。——中略——

ところで、毎週の静坐会への出席が始まり、小林先生や曾我さんにお会いするようになりますと、私は今までは違った雰囲気の中で少し、とまどったり、それでいて何か心懐かしい、私の心に安らぎを与えてくれる雰囲気らしい雰囲気は今考えますと、小林先生や曾我さんの内なるほとけ心のおのずからなる発露とでもいうべきものかと思えます。

——中略——

岡田先生が亡くなられたあと、静坐の道が今日まで京都の静坐社を中心として力強く生き続けていますのは、小林先生の執念ともいうべきご精進、ご努力によることはもちろんですが、小林先生の良き相談相手として、また、面倒な実務まで骨身おしまずやって下さった曾我さんの存在に負うところが大きいと思います。——中略——

ところで曾我さんについて特に話しておかねばならぬことは、曾我さんが教育に静坐を取り入れて成功されたという実績です。三十六年に神戸市役所を退職されたあと、原口市長の懇請で神戸市立産業技術学院の仕事を引き受けられました。翌年から学院の生徒に週三回、十五分の朝の静坐を、また、夏には静坐週間を作って指導されました。三十八年には神戸市内の私立高校生の夏季合宿で静坐を指導されています。四十八年には成徳学園理事長兼校長に就任されましたが、ここで曾我さんはそれまでの経験を生かして、学校教育に静坐を導入することを始められました。必修クラブ活動の中で全校生に自ら静坐を指導されました。そのあと曾我さんが病気でお亡くなりになるまでの年月は決して長くありませんが、念仏者として、静坐人としてそして真の教育者として充実した人生を生きたと思います。曾我さんが亡くなられたあと、曾我さんによって培われた静坐の伝統が、脈々と成徳学園の中に今日も生き続けていると聞きますことは、私も静坐人にとって嬉しいことです。——後略——



無言のお教え

島田 恵子

(成徳学園社会科講師)
(昭和五十九年現在)

昭和五十年に成徳学園に参りましてから、曾我先生がお亡くなりになるまでの四年間、私は先生の膝下にあつて仏教と静坐の勉強をさせていただきました。これは全く予想もしなかったことで、まことに不思議な縁としか言いようがありません。と申ししましても、京都から神戸に出て参りますにはそれなりの事情もあり、「曾我先生の許でなら突破口が開けるかもしれない。」とわたしなりに決意して、京都での雑事・雑用はすべて切り捨てて参つたのです。

それからの四年間、先生から実に人生生活のさまざまな面について、その真髓に触れるお教えをいただきました。数々の思い出が、その折々の情景と共に浮かんでまいります。その中でとりわけ私の脳裏に焼き付いて消えない一つの思い出がございます。

先生が二度目の入院をされた日のこと、病院から私にお手紙を下さいまして、「歎異抄の中から問題点を書き抜いてきて下さい。何でもいい、言葉の意味が分からないのでもいいから質問の形で書いてきて下さい。」との指示をいただきました。考えがまとまらないまま、それから一週間ばかり経って病院にお見舞い

に伺いました。先生は検査の直後で、ベッドに横たわっておられました。鼠径部から器具を入れての大変な検査だったらしく、疲労困憊の様子で額に脂汗をにじませておられました。先生は私の顔を見るなり「ああ、書いてきてくれたね。」と嬉しそうにおっしゃいました。「実は、忙しくてちよっとまだ考えがまとまらないのですが・・・」と申し上げますと、とたんに先生は大声で一喝されたのです。「言い訳をするな！頭で考えるな！」それは心を失っていた私への渾身の力を込めた鉄槌でございました。この四年間一体何をしていたのか、生死の一大事をおろそかにするのは。私はその時の先生の悲しみとも怒りとも苦しみともつかぬ何とも言いようのないお顔を生涯忘れることはできません。

後日、私は日頃から抱いておりました宿業についての質問を、正直にありのままにたためて先生に見ていただきました。先生はまだ勘気がとけず、恐いお顔付きでベッドから半身を起こして読んでおられました。少しづつお顔を和らげてこられ「まあ、そこに坐りなさい。」とおっしゃってそれからあとは静坐の小林先生の思い出話など懐かしそうになさいました。歎異抄のことについては、一言もお触れになりませんでした。私はその時曾我先生から万感を込めた無言のお教えをいただいたと思っております。

親鸞聖人のご和讃に「たとひ大千世界にみ

てらん火をもすぎゆきて、仏の御名を聞くひとは、ながく不退にかなふなり」というのがございます。このご和讃は、その数日後先生が病院から抜け出して礼拝の時間にお話しなさったときに引かれたもので、先生の肉声とともに私の心に刻印されております。先生は懈怠・懈怠のどうしようもない私に、まことの「不退の心」をお示しいただいたのでした。

曾我先生のこと

重川 美枝子

(成徳学園英語科教諭)
(昭和五十九年現在)

昭和五十三年三月三日、終礼をすませて職員室に帰つてくると、曾我先生ご危篤の報に私はアツと驚いた。今、三年二組の生徒たちにお見舞いのお便りを出すようにと言つて来たところだったから。曾我先生は、生徒からの便りを殊の外喜ばれ、丁寧にお返事を出された。

六日前の二月二十五日、卒業式の日、お見舞いに行くと、とてもお元気そうで、卒業生が卒業の報告に来た話などを嬉しそうになさった。初谷さん、水藤さん、真鍋先生、児島さん、私

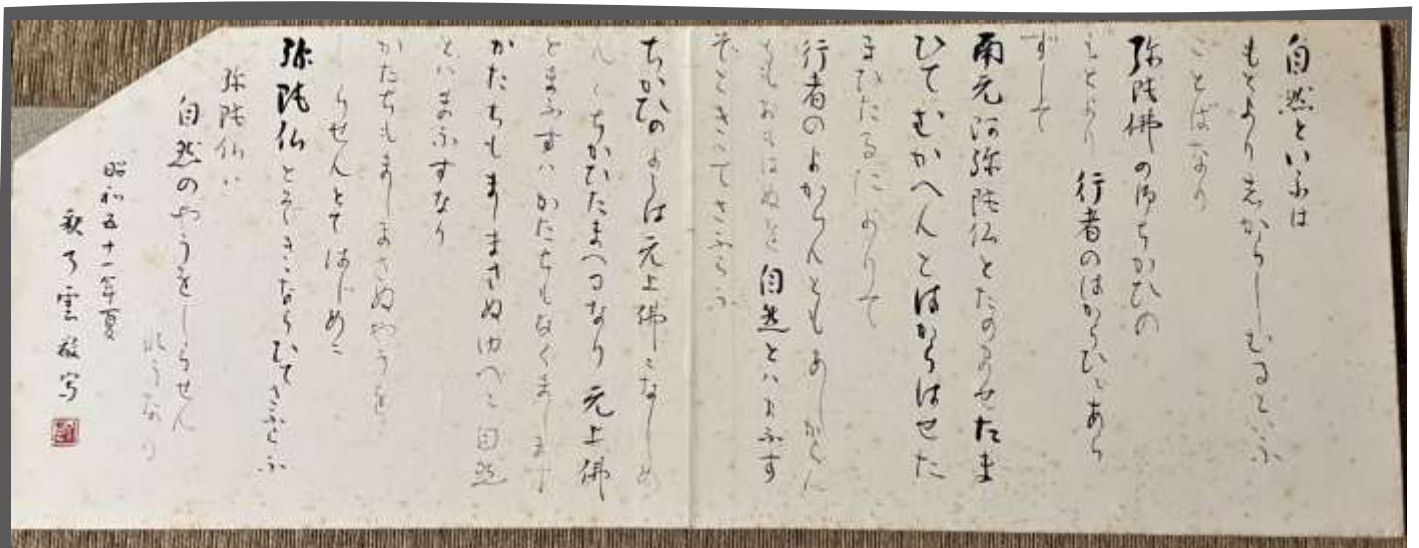
の五人で伺った。曾我先生はベッドの上に座って、墨をすり、今の心境だとおっしゃって、「無理するな、腹立てまいぞ、何があるうと今日が最高」と書いて一人ひとりに下さった。その先生が六日後の三月三日、ご逝去あそばされようとは！児島さんの戴いた紙が絶筆となった。

生徒（特に非行生）のこと、職員一人ひとり、静坐に集う人、各々に親身となつて考えて下さった。健康には特に留意され、玄米食や漢方などを辛抱強くすすめて下さった。

曾我先生と私との出会いは昭和四十一年頃だったろうか。浅井成海先生が法句經の研究會をされるといので喜んでいた私は、中止と書かれた掲示を見て落胆した。たまたまその場にいらした曾我先生が「研究会をやりましょうか」と言つて下さった。私は喜んで、早速「みんなに呼びかけます。」と言うと「そんなことせんでよろしい。あんただけでええ。」たった一人のよく知りもしない人間のために法を説いて下さるといのか！世の中にはこんな方もいらつしやるのか！と驚いた。それから月一回、放課後研究室で講義して下さった。テキストは鈴木大拙選集をよく使った。私の勝手放題の暴言にも「そのままでええんじゃないの。」と言われると、「生きる」ことの意味が拡がり、心が和らぎ、和んだものだった。曾我先生は「歎異抄の出会い」の中で、田中孝雄先生について「《わたし》という存在を全面

的に理解し、受け入れてくれる人として、私がそれまでの人生で未だ出会ったことのない存在に、今はじめて出会ったという思いがしたからである。」と書いておられるが、それは私が曾我先生に感じたものと、奇しくもぴたりと重なるものである。

やがて理事長になられ、校長になられて、この生徒一人の研究会は消えていき、校長になられたことを恨めしく思ったものだ。しかし、ご多忙の中で、宗教の教科書を使つての「職員宗教研究会」、保護者も含めての「仏教講座歎異抄」「静坐」と研究会は続けられた。何も分らぬままに屁理屈ばかりこねながらも、楽しく嬉しく聞かせていただいた法話に較べて、静坐の方は足がしびれ、呼吸法が呑み込めずいつまでたっても先生の言われる「楽しい静坐」にはならなかった。身に余るご芳情の数々に、何一つお応えすることなく、突然逝つてしまわれた先生に掌を合わせた時、「静坐を何としても続けます。」と約束していた。その静坐もご指導いただいてより十年の月を重ね、やつと少し分りかけてきた。今は、困った時、苦しい時、曾我先生ならどうなさるか、どう言われるかと考えると、おのずから答えが出てくるようです。そして「何があつても「今日が最高」といえる日を送っていききたいものと思つています。



＜重川先生に贈られた了雲先生お手製のミニ屏風＞

遺稿 I 形の静坐・信の静坐

曾我 了雲



中国の曇鸞大師の往生論註という本の中に「帰命はすなわち礼拝である。だが礼拝はただ恭敬であって、これが必ず帰命であるというわけではない。しかし、帰命は必ずこれ礼拝である。」ということばがあります。帰命というのは信心のことで、信は必ず礼拝となつてあらわれるが、信のない形だけの礼拝もあることであるので、礼拝がそのまま帰命とはいえない。こういう意味であると思います。

岡田先生がご令弟の井上嘉三郎先生に送られた書信の中に、「静坐と呼吸とを分けて考えれば、呼吸は静坐を完全にするための方法技術であるから、もちろん「静坐」が根本である。しかしさらに一步すすめて考えると、静坐も呼吸も、我々の心身を開發して、天地みな春という境地に至るための形式（方法）であるから、主眼とするところは、「信」の一字にあることを忘れてはならない。だから、適当な指導者につかないで、ただ形式だけにこだわるのは、この上なく愚かなことで、なんの役にも立たない。」（原文は語録の中にある。）という意味のおことばがあります。私どもが、とかく静坐を形でとらえてゆく傾向を

いましめられたことでありましょう。

静坐について、いろいろな受け取り方があります。からだの病気をなおしたい。精神的虚脱から立ち直りたい、長寿を得たい、成功したいなど、人それぞれの願いから静坐をしようと思いたつわけでしょう。これは人情の自然と申せましょう。人情の自然ではありませんが、静坐を何かに役立たせようとするのでありますから、静坐を形としてとらえているという相対的把握の世界であります。

岡田先生のおことばは、こうした人情の自然から静坐の門にはいった人たちが、静坐の自然にたすけられて、「信」の世界に導入されなければならないことを説かれたものだと思います。

私は「静坐の自然」と申しましたが、静坐の自然が活動するためには、岡田先生のおことばでは、「適当な指導者」が必要だとされまゝす。これは重要な指摘だと思ひます。信の静坐へ転入する条件は、いろいろあるうと思ひますが、よき「指導者」に会うという因縁が欠くことのできない必要条件だとお示しです。

こんな簡単なことだから、自分で独習できないはずはないと思われがちです。形としては、確かに独習できますし、またそれで相当の効果をあげることができます。しかし信の静坐は、おそらく独習の中では獲がたいのではないかと思います。指導者をおろそかにし

ない精神のなかで、はじめて、岡田先生のおことばにある「信の一字を主眼とする」境地が開けてくるものと信じます。

私をはじめて静坐に縁をえましたのは、中学時代、十五、六才のころ、田中孝雄先生にお手ほどきを受けました。田中先生は岡田先生に直接ご指導を受けておられました。私は田中先生に一方ならぬご恩を受けたことを思い出します。その後、京都の静坐実習会に第一回から参加して諸先生のお導きに会いましたが、ことに、小林信子先生には、長く、たゆまぬご愛護にあずかりました。愚鈍で怠け者の私が、今日こんなご縁の中に日暮しできることは、全く小林先生のおかげと申さなければなりません。「指導者」を重視された岡田先生のおことばが特に私にとって感銘が深いわけです。

世間の静坐論議は、僭越な言い分ですが、形の静坐の中での論議と思ひます。うまくいく、いかない、役に立つ、立たないこうするがよい、してはいけないう等々、これはすべて私どものせまい経験思索の中での分別です。そこをスッパリと飛び越えて、信の一字へ転入せよと、岡田先生は呼びかけて下さっているのです。

「帰命は礼拝であるが、礼拝は必ずしも帰命ではない。」

静坐真実義に帰命いたしましょう。

（小林信子先生喜寿記念誌より）

遺稿 2 百面相

曾我 了雲



私が静坐を始めましたのは十七、八の頃中学校の先生から教えて頂いたのですが、こまやかなご指導ではなかったようで、やつたりやらなかったりしておりました。

その後、ご縁を得まして第一回の京都女学校の講堂での静坐会に、はじめて正式に静坐というものを学ぶために参加させて頂いたのが、昭和二年のことでございます。翌年京都へ参りまして大学に入りました。その頃五条の静坐社で静坐会がありましたが、五月の頃でセルの着物を着て、ハカマをはいて、生意気にステッキを持っていたことを覚えております。そのとき、小林信子先生に姿勢を直されたのです。胸をキュッとおさえられた。実に気持ちよく坐っていたのですが、胸をおさえられたとたんから、どうも調子が狂いまして面白くない。それから三ヶ月間、その問題が悩みの種でした。

八月に入り、京都女学校で橋本五作先生をお迎えして実習会が開かれました。私は今度こそこの問題を解決しようと意気こんで、一番前に坐って橋本先生をにらみつけるようにしてお話を伺っていました。先生は、黒板にチョークで坐り方をお書きになった。私はチョークのゆ

つくりしたすべりを食い入るように見つめていました。そして肝心のところにチョークが来たとき、ハッと気がついた。ナルホドこれだな、と。その印象が今でも非常に深いのです。それ以来、静坐というものがどうにか分かったといえますか、小林先生から直されずにすむようになったのです。

僅か二ミリか三ミリのことですけれども、胸に力が入りますと、みぞおちも丹田も動きが非常ににぶるわけでした、それは胸に力が入ると重心が上の方になる、ということではないかと思えます。そうして全体の坐相といえますか、坐った姿勢が自然の風景の中に入り込めるような、そういう姿にならないといけない。それぞれくせがありますが、それはそれなりに、どことなしに自然の中にはまりこんでいるという姿でなくてはならないと思います。

静坐は、私の生活にとって非常に大事なもので、切っても切れない関係におかれています。手紙一つ書くにしても、ちゃんと机の前に坐って、呼吸をととのえてみませんか、なかなか文章にならない。人からむつかしい問題を与えられて、その返事に困っている時、呼吸をととのえて静坐する以外に手がない。そうして坐っておりますと何か声が聞こえてきて、お返事ができるのです。

歳をとってから思うのですが、静坐の効能は、坐ると自分が見えてくるということでは

す。いい恰好をしようと思つてうろたえ騒いでいる自分まず、見えてくる。それから、自分が傷つかないように何とか旨くゆく方法はないかとアクセクしている自分が見えてくる。あいつシヤクにさわって仕様がな、何とかしてやつつける方法はないか、と顔をクシヤクシヤにしている自分が見えてくる。こういう風に静坐しますと、百面相が自分という者の姿があらゆる角度でみえる。これが見えますと私に与えられた問題の所在が、だんだん客観的にはつきりしてまいります。

我々が問題を問題としておりますのは、実は問題が問題であるのではなくて、問題の中に私があつて、その問題に対する私の姿勢がやはり一番問題だったんだ。ということが坐っている間に気がついてくるように思われます。まあ一言で言えば、欲で突っ張っている自分というものが見えるわけです。

その欲でつっぱった自分が見えてきますと、(なかなか欲を捨てることはできませんけれども) 燃え上がりたがり上がっている欲がちよつと鎮まっております。そうすると事を冷静に処理する筋道が見えてまいります。それが私の人生を平安にし、のびやかにし、明るくし、私の人生を安心した人生として受けとめることができる筋道であると、この頃静坐を通して思うようになりました。

(静坐社創立六十周年記念文集より)



遺稿 3 罪惡深重の身なれば

曾我 了雲



不安と苦悩になやむとき、私たちは静坐して丹田に力を満たすべきことを学んだ。それによって、不安と苦悩を、そのままに受け止めることができるのである。「三百六十五日、一瞬たりとも力が抜けてはいはいかん。」とは、岡田虎二郎先生のおことばである。ある人は、それは不自然だから、二六時中意識的に丹田に力を入れることには批判的だという。人は多く「二六時中」の語に引っかかるのであるう。

私はこの言葉をこう理解したいと思う。一瞬たりとも力が抜けてはいはいけないというのは、人間の不安と苦悩の底知れない闇を一瞬たりとも見逃せないという人にして、はじめて言いうることばであろうと。私はそこに岡田先生の人間への深い「愛」を見る。

私たちは、自ら苦しむと言いながら、その苦しみは自分の手で払いのけうるはずのものだとする驕慢さから逃れがたい。親鸞の言葉を借りれば「罪惡深重」の私が見えないのである。「何れの行も及びがたき身なれば」ということが知られていないのである。

罪惡深重の身には、ただ、「黙って坐りなさい」という教えほどありがたいものはない。

(静坐社創立六十周年記念文集より)

編集後記

静坐誌第五十四号「先人を偲ぶ」は曾我了雲先生に登場願いました。当初は、曾我先生に半分、あと半分は前回からの持ち越しの「イス式静坐」について掲載しようと考えておりました。

それで出来上がった原稿を何人かの先輩先生に見て頂いたのですが、全面的賛同は得られませんでした。それもそのはず、岡田先生でも文章は誤解を招くからといってすべて書付を処分されてしまいましたので、文章化することは危険この上ないことだと思います。それで、イス式につきましては今後の検討課題とすることし、改めて曾我先生の遺稿をまとめさせていただきます。

多くの関係者から資料が寄せられましたので、目を通すのに精いっぱいでした。

今回、曾我先生の足跡をたどるにつけ、私は、大変な教訓を得ることができました。今までの私の取り組みは何だったのかと反省することしきりです。曾我先生の学校教育での成果、島田先生や重川先生へのご指導、又それを通じて考えられる先生自身の人生への取り組み態度、岡田先生への絶対的「信」其れは親鸞聖人への「信」と同時に関係する人々への「信」でもありました。

今回取り上げさせていただいた、先生方小松幸蔵先生、藤井栄昭先生、前井重美先生、島田恵子先生、重川美枝子先生方の文章さらにここ

には掲載できませんでしたが曾我先生の遺稿の数々、生き様を通じて、「私は死にません。」と言った岡田先生の言葉の意味がはつきりと感じてきたような気がしました。

ところで藤井英昭先生の奥さんが曾我先生のご息女であることを知り、懐かしさも手伝ってお電話させて頂きました。全くお元気な声でお話してくださいました。お名前は「龍子」さんとおっしゃいます。お年をお聞きしますと、なんと私と同年。奇遇にびっくりしました。重川先生に電話しますと「龍子」さんはお元気でしたか？」とのお返事でした。私が知らないだけで皆さんそれぞれにお付き合ひのある方ばかりでした。

そんなことも手伝って、今回の特集は、全く私のためにあつたような気がしてまいります。曾我先生の厳しい探求心、後に続くものとして、もつと真剣に「今こそ一大事。何があつても今が最高。」という教えを私のものとして、頑張っていこうと思われました。

コロナに罹患し、夏期実習会には参加できず、少し、肩身の狭い思いでしたが、新しい年の初めの五十四号何とかお届けできることができ、ほっとしております。卯年はジャンプの年と言われます。皆様方の益々のご健康ご多幸さらに静坐会のさらなる充実・発展を心から祈念致しまして編集後記にかえさせていただきます。

(事務局 松端 孝元)